

入学したときは「学年ビリ」 4年生で管打コン特別大賞受賞！ 日橋辰朗



Tatsuo Nippashi

昨年11月に行われた第26回日本管打楽器コンクール・ホルン部門で第1位入賞。各部門の1位が出演した「入賞者特別大賞演奏会」では、4人の中で最年少の現役4年生ながら、みごとに特別大賞を受賞した。このときオーケストラをバックに演奏したリヒャルト・シュトラウスの2番(本選と同じ)は「大好きな曲」だったそうだ。

「本選よりも断然うまく演奏できて、いま振り返るとよくあんな演奏が出来たなと思います。(1位を取ったことで)まわりがけっこう盛り上がり、それに乗せられたんでしょうね」

管打楽器コンクールは今回が初めて。3年生のときに受けた日本音楽コンクールで1次を通り、それが逆にプレッシャーになって1次は緊張したという。それでも……

「水野(信行)先生によくいわれたのは、ホルンは歌う楽器だということ。僕自身も、テクニカルなことよりも歌うことが好きですから、コンクールではあっても一つのコンサートのように、いかに聴く人の心を捉える演奏ができるかを考えよう……。1位を取りに行ったら、きつと取れないと思うんです。ミスしたら、と思うと怖くなって。結果や順位を考えず、客席のホルンの仲間や先輩、プロの方たち

に、こんなホルンもあるんだということ聞かせようと思つて臨みました」

東京都東大和市出身。中学の吹奏楽部でホルンを始め、高校2年のときに音大を志して井手詩郎氏のレッスンを受け、2006年に東京音大に入学した。

「奏法もなにも分らず、大学に入つて水野先生にアンブシユアを一から見直させられたんですよ」という。それまで上唇にマウスピースの圧力をかけてトランペットのように吹いていたのを、やや下向きにするようにアドバイスされ、水野先生には「これで直らなかつたらホルンを吹けなくなる可能性もあるが、直つたら急速に伸びるよ」といわれたそうだ。

「アンブシユアを直して最初の4ヶ月ほどは音が出なかつたんです。前のアンブシユアに戻せば普通に吹けるんですが、それでも新しいアンブシユアに賭けようと思つて。で、ある日コツを掴んだら、途端に変わったんです。ビックリしました。音も変わったし、コントロールしやすくなつた。

入学したときは僕、学年で一番下手くそだったんですよ。ところが、半年後の10月、ソロの中間試験ではホルン科で2番目の成績でした。これにもビ

ックリしましたね(笑)」

「二つのことをやり出したら集中するタイプ」と自分を語る。

「ちょっと楽天的というか、スランプだとか調子を崩すだとかは、考えないようにしているんです。

演奏家のタイプは人それぞれだと思いますから、人に影響されるよりも、人はどうであれ、自分の音や音楽をしっかり持つことの方が大切だと思つて来ました。いろいろな人と演奏し、いろいろなことを経験して、それで自分はどうするのか?ということを考えることが大切だと思つています。オーケストラのエキストラの仕事でもそうですが、この音しか出せない、というのでは駄目なんです。すべて出来るとはもちろん思いませんが、様々な引き出しを出来るだけ多く持ちたい。そのために、これからもっといろいろな世界を知らないといけないと思つています」

オーケストラのエキストラを初めて経験したのは2年生のとき。朝起きた

ら依頼のメールが入つていて、「夢じゃないかと思つた」という。この3月に東京音大を卒業し、フリーランスとして活動しながらオーケストラのオーディションを狙う。「留学は?」と尋ねると、「チャンスがあれば留学したいとは思いますが、オーケストラのオーディションを狙いながらだとタイミングが難しい」。

使用楽器は大学2年から使っているアレキサンダー1103。

「マウスピースはちよくちよく変えているんです。最初は浅めで小さなマウスピースを使っていたんですが、それだと音が細く感じる。音を太くしようとカップを深くすると、今度は高い音が出なくなる。その繰り返しだったと思います。今はその中間ですね。浅くないマウスピースを使つても高い音が出るように、奏法を少しずつ微調整していつか、やっと1年前ぐらいに落ち着いたところで管打楽器コンクールを迎えました。だから時期も良かったんですね」



昨年の第26回日本管打楽器コンクール特別演奏会でR.シュトラウスのホルン協奏曲第2番を演奏する日橋さん。



自分を「典型的な上吹き」だと言ふ。オーケストラのエキストラも1番のアシスタントか3番。某都内のプロオーケで初めて吹いたとき「最初はわけが分からなかつた」とか。(東京音楽大学キャンパスで撮影)